

日系ブラジル人の特色の変化

カイゾウ・イワカミ・ベルトラン
ソノエ・スガハラ
近田亮平

はじめに

ブラジルへ最初の日本移民が到着したのは1908年であり、今年で同国の日系社会は移民100周年という節目の年を迎えた。ブラジルの日系人に関しては、同国社会の中で教育や経済レベルが相対的に高いことや、サンパウロ州を中心に多く居住していることなどが特色として挙げられており、1980年代後半にブラジル国内の日系人を対象に実施されたサンプル調査により、同時期におけるこれらの特色については多くの部分が実証されたといえる(サンパウロ人文科学研究所[1988])。その後、日系ブラジル人に関する定量的な調査研究としては、1990年代から顕著となった日本への「デカセギ」現象や移民100周年との関連から、その対象や方法などは異なるが、日系社会実態調査実施委員会[2002]、McKenzie & Mistiaen[2007]、IBGE[2008]などが発表されている。しかし、非日系人との混血化がさらに進んでいることや、ブラジルの人口センサスが人種のみでエスニック・グループに関する設問がないことなどから、日系ブラジル人全体の社会経済的な特色がどのように変化してきたかについての定量的な調査研究はあまり行われていない。

そこで本稿では1960年、1980年、2000年の人口センサスのマイクロ・データを用い、人口分布、

教育、所得と経済活動に焦点を当て、ブラジルの日系人⁽¹⁾のプロフィールとその変化を明らかにすることを試みる⁽²⁾。その際に、導入部分としてはじめにブラジルと日本のヒトの流れについて歴史を追ってまとめる。そして、日系人の特色と変化を明らかにした後に、1世紀もの歴史を有するにいたったブラジルの日系社会の今後について、



サンパウロの日本移民100周年祭で展示された折り紙のカーニバル(Mari Kanegae氏撮影)

若干の考察を行うことにする。

I ブラジルと日本のヒトの流れ

日本とブラジルの正式な外交関係は1895年の修好通商航海条約調印により樹立されたが、ブラジルへの移民契約が日本の皇国殖民会社とサンパウロ州農業局の間で交わされたのは1907年のことであった。そして1908年6月18日、158家族781人を乗せた移民船「笠戸丸」のサントス港到着により、ブラジルへの日本移民の歴史が幕を開けることになった。ブラジルへの日本移民は、はじめに日本国内の他の地域、その後はアメリカ大陸や満州(現在の中国東北地方)などへ移り住んでいった日本人の大規模な人口移動の一部を成すものであった。この日本人の大量移動の要因としては、明治政府が推進した経済や社会制度の近代化、日露戦争を誘因とする国内の社会経済的混乱などが挙げられる(Woortmann[1995])。

ブラジルへ渡った当時の日本移民は、ほとんどがサンパウロ州奥地のコーヒー農園での労働に従事した。しかし、当時の外国移民はブラジルで1888年に廃止された奴隷制に代わる労働力として導入された面が強かったことに加え、日本移民は異なる言語や食糧などの多くの問題に直面することとなり、移民当事者の言葉によれば移民初期はまさに「生き地獄」であった(Shindo[2005])。日本移民は第2次世界大戦の勃発により一時中断されたが、戦前に約19万人、戦後は約7万人がブラジルへと渡って行った。戦前移民の主な特徴としては、小農または借地農などの農村出身者が大半で、ブラジルにおいて短期間で資金を貯めた後に帰国することを意図していたが、日本の敗戦によりブラジル永住を余儀なくされたことが挙げられる。一方、戦後移民については、その多くが台湾、

朝鮮、満州などの日本の旧従属地や植民地からの引き揚げ者であり、永住の意図を持ってブラジルへ移民したとされる(Saito[1980])。なお、ブラジル滞在期間の長期化や永住希望者の増加とともに、日本移民の職業も多様化していった。

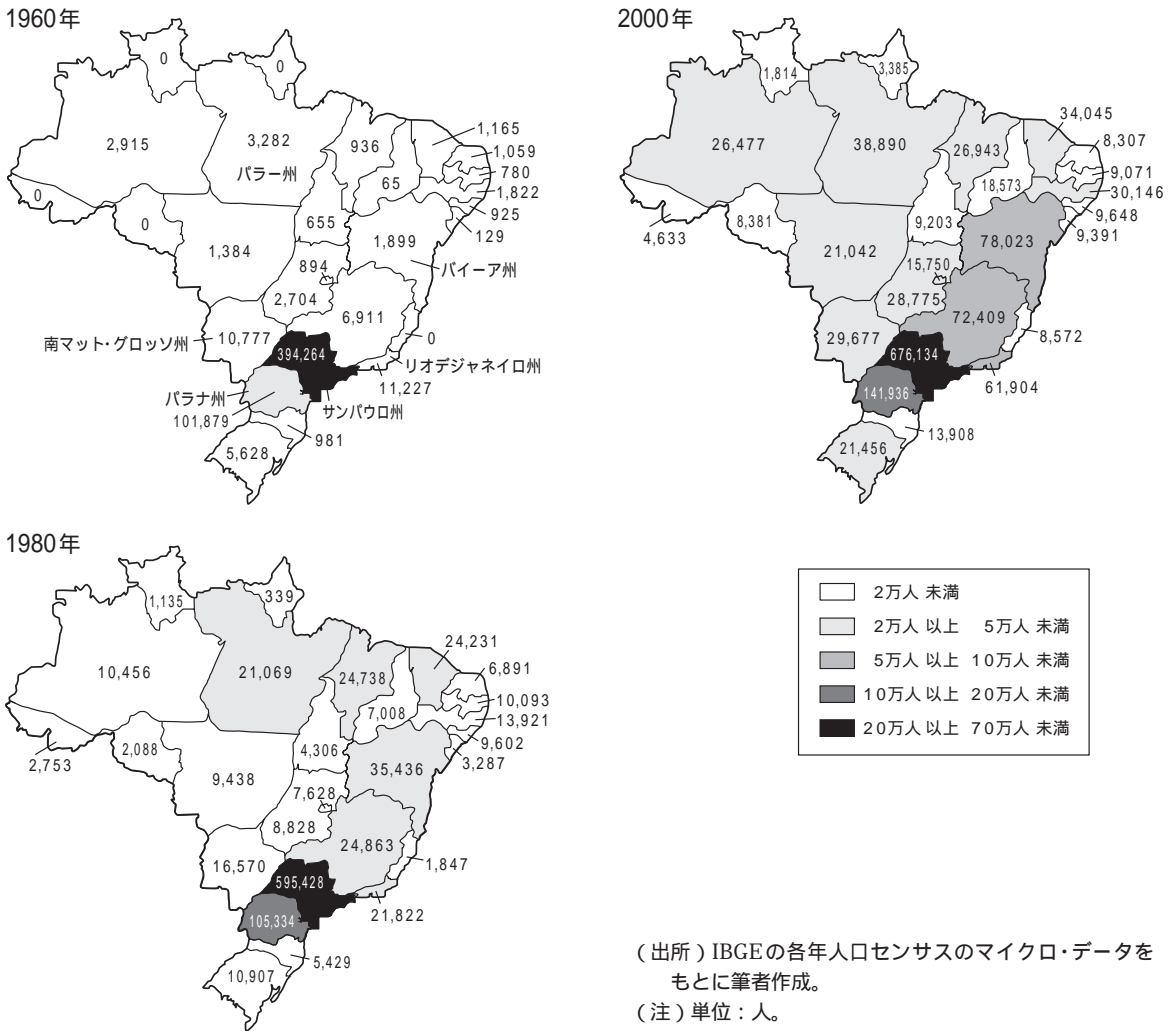
しかし、日本とブラジルの間のヒトの流れは1980年代後半以降、その方向を逆転させることになる。この流れは、世界レベルでの資金や財などとともに労働力の急激かつ大量な移動を意味するグローバル化の一端を成すもので、「デカセギ」現象と呼ばれるようになった。同現象の背景には、祖先の母国である日本を知りたいという日系人の願望に加え、経済的混乱を繰り返したブラジルと経済大国になった日本とのギャップが存在しており、デカセギ労働者の多くが日本人によって敬遠された、キツイ、キタナイ、キケンという“3K”の仕事に従事しているとされる。

II 人口分布

本稿では人口センサスのデータから「日系人の人口」を抽出するため、少なくとも家族構成員の1人が「黄色人」か「日本生まれ」または「(過去5年以内に)日本から転居」と回答した世帯を全て選び出し、その中から「黄色人種」で「他のアジア諸国(中国、台湾、韓国)生まれ」や「同諸国から転居」と回答した者を含む世帯を除外した。そして、地域と主要州ごとにブラジル全体と日系人の人口および割合をまとめたのが表1であり(各主要州の位置は図1を参照)、各年の人口分布を地図上にまとめたのが図1である。

1960年には40万人強であった日系人の人口は、1980年にほぼ100万人に達し、現在は約150万人といわれるが、ブラジルの全人口に対する割合は常に1%未満であることがわかる。人口分布に関

図1 日系人の人口分布（1960年，1980年，2000年）



しては、サンパウロ州をはじめパラナ州と南マツト・グロッソ州(表1の太字)に多く居住している。この傾向は各人口センサスを通じて一貫したものであるが、南の諸州に多く居住していた日系人が、時間の経過とともに北や内陸部を中心にブラジル全土へと拡散していったことや、特に近年サンパウロ州への集中度が低下していることがわかる。

このような人口の分布と移動における変化は、アグリビジネスに代表されるブラジルの内陸部を中心とした地域開発、日系人の職業が多様化する一方で農牧業の比率が相対的に高いこと(後述)、そして、主にサンパウロ州の日系人口割合の低下に関しては、現在、約30万人といわれる日本へのデカセギの影響などが考えられよう。

表1 地域と人口センサスごとのブラジル全体と日系人の人口(1960年,1980年,2000年)

(単位:人)

	1960			1980			2000		
	全人口	日系人	割合(%)	全人口	日系人	割合(%)	全人口	日系人	割合(%)
北部*	1,380,091	3,570	0.3	3,216,257	21,077	0.7	6,715,190	53,893	0.8
パラ州	1,526,325	3,282	0.2	3,403,498	21,069	0.6	6,195,959	38,890	0.6
北東部*	16,237,568	6,881	0.0	25,358,773	99,771	0.4	34,696,719	146,124	0.4
パイア州	5,910,429	1,899	0.0	9,455,392	35,436	0.4	13,085,762	78,023	0.
南東部*	11,197,675	6,911	0.1	15,403,443	26,710	0.2	21,002,635	80,981	0.4
リオデジャネイロ州	6,601,038	11,227	0.2	11,291,631	21,822	0.2	14,392,106	61,904	0.4
サンパウロ州	12,775,121	394,264	3.1	25,042,074	595,428	2.4	37,035,456	676,134	1.8
南部*	7,479,906	6,609	0.1	11,402,141	16,336	0.1	15,545,711	35,364	0.2
パラナ州	4,259,610	101,879	2.4	7,629,849	105,334	1.4	9,564,643	141,936	1.5
中西部*	2,021,118	4,982	0.3	5,436,951	25,894	0.5	9,560,599	65,567	0.7
南マット・グロソ州	568,983	10,777	1.9	1,369,769	16,570	1.2	2,078,073	29,677	1.4
合計	69,957,864	552,281	0.8	119,009,778	985,447	0.8	169,872,853	1,408,493	0.8

(出所) IBGEの各年人口センサスのマイクロ・データをもとに筆者作成。

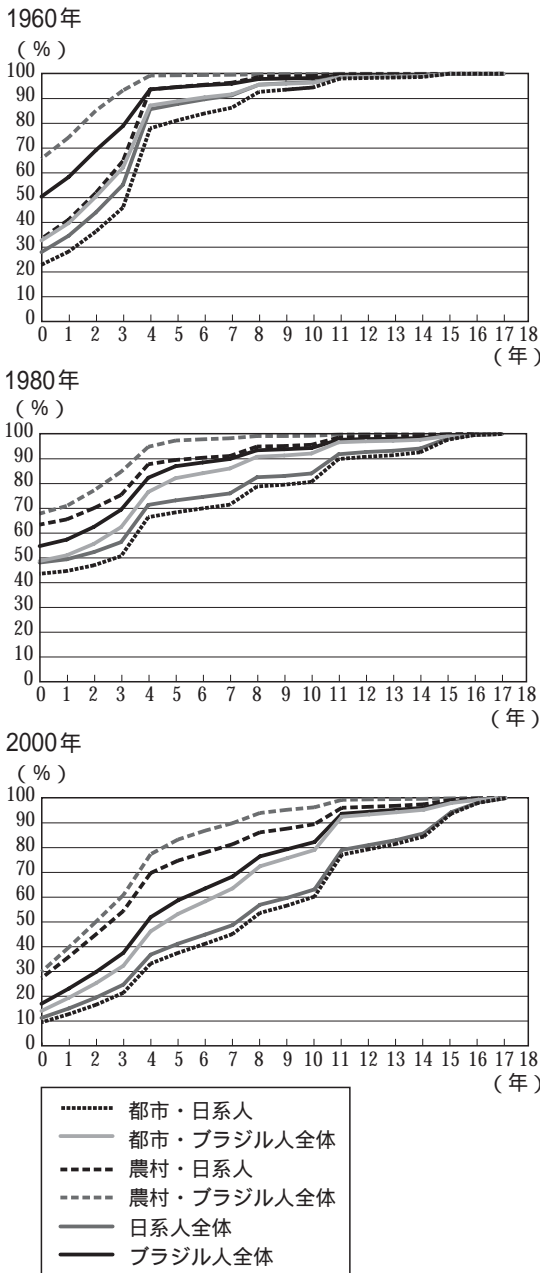
(注) *各地域の数値には表中の各州の数値は含まれていない。1977年にマット・グロソ州から南マット・グロソ州が分離したため、1960年の数値は前者のムニシピオ(市)から後者の所属になったものを分けて算出。また、1988年にゴイアス州(中西部)からトカンチンス州(北部)が分離したため、1960年と1980年の数値は前者のムニシピオから後者の所属になったものを分けて算出。

III 教育

日系人の教育レベルを理解するため、日系人とブラジル人全体を都市と農村という居住地域に分け、それぞれの修学年数に関する累積比率分布を各年の人口センサスごとにまとめた(図2)。なお、人口センサスの質問票には「ブラジル国内の修学年数」との規定はないため、国外(日本)で修了した教育も年数に含まれるが、回答は自己申告であることから国外での修学年数が含まれていないケースも考えられる。また、修学年数の累積比率が5歳以上の人口から算出されており、日系人は非日系人よりも出生率が低く平均寿命が高いため、全体的な傾向を変えるほどではないが、特に修学年数が短い部分において年齢構成のバイアスがより影響しているといえる。

各人口センサスのデータより、どの累積修学年数においても日系人全体の割合はブラジル人全体のそれよりも低いことから、日系人の学歴が相対的に高いことがわかる。また、居住地域に関しては、日系人とブラジル人全体とともに教育環境のより整っている都市部の方が農村部よりも修学年数が長くなっており、この差は時間の経過とともに拡大している。初等教育の普及と高学歴化が進む近年のブラジルの中でも、黄色人種系人口の学歴上昇が顕著であり、特に日系人の学歴の上昇が最も顕著であるとともに他の人種グループとの格差が広がっているとされる(Beltrão[2005])。しかし図2から、農村部の日系人の修学年数は都市部の日系人だけでなくブラジル人全体との間で格差が拡大しており、一概に“日系人”として捉えることがより困難になってきている状況を理解するこ

図2 修学年数順累積比率：居住地域および人口別
(1960年, 1980年, 2000年)



(出所) IBGEの各年人口センサスのマイクロ・データをもとに筆者作成。

(注) 5歳以上の人口。1960年のみ就学年数に16年と17年が存在しない。

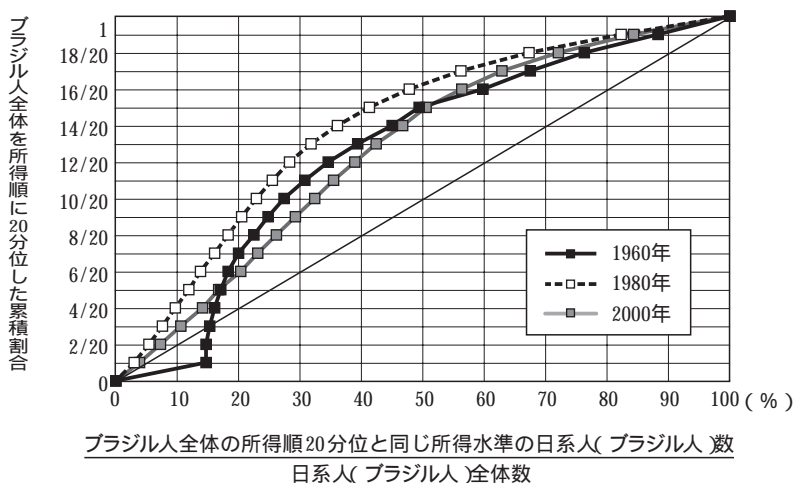
とができる。

Ⅳ 所得と経済活動

最後に日系人の経済的特色を把握すべく、まず所得についてブラジル人全体に対する日系人の所得順累積分布を人口センサスごとにまとめた(図3)。縦軸はブラジル人全体を所得順に20分位し、低い方から順番に並べた所得累積比である。また、横軸はその各20分位所得と同じ所得水準の日系人(またはブラジル人)の数が、日系人(またはブラジル人)の全体数の中に占める割合を示した人口累積比である。したがって、ブラジル人全体のみについて言えば、縦軸と横軸の分母(ブラジル人全体の数)と分子(各所得に相当するブラジル人の数)が一致するため、グラフ上では基準線となる斜度45度の線を表すことになる。では、比較対象となる日系人はどうなるかという、例えば1980年のグラフで低位20分の4(20%)の所得層(縦軸)を見ると、ブラジル人(斜度45度線)は全体の20%(横軸)が同所得カテゴリーに属するのに対し、日系人は日系人全体の約10%(横軸)であるため、日系人の方がブラジル人全体より所得状況が良好であることになる。また、グラフの数値が斜度45度線より上にいくほどブラジル人全体よりも所得が高く、下にいくほど所得が低いことを意味する。なお1960年に関しては、日系人の15%とブラジル全体の10%が「所得なし」と回答したため、これらの数値の差から下位所得部分の正確な数値算出が不可能となった。

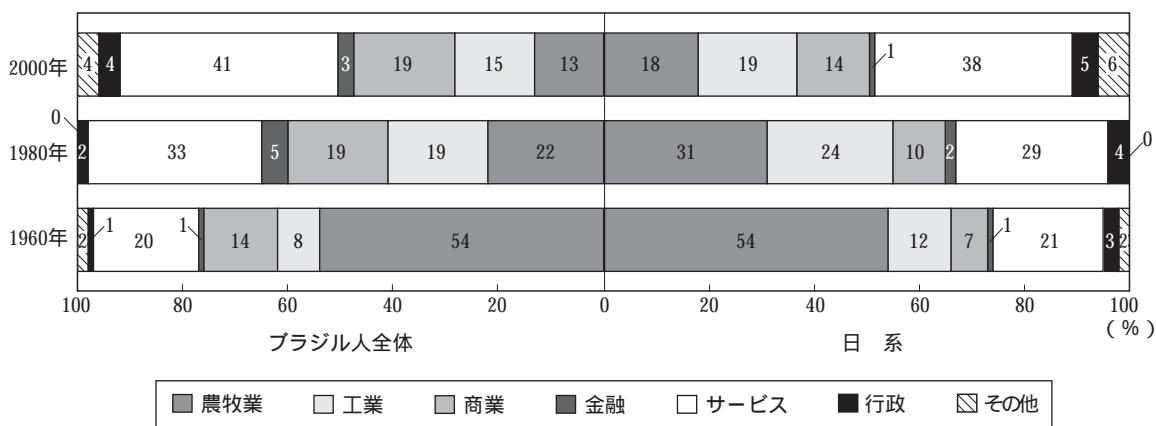
これらのデータから、日系人の所得がブラジル人全体を常に上回っており、特に日系人の所得状況が1960年から1980年にかけてブラジル人全体よりも相対的に向上したことがわかる。しかし2000年のデータは、双方間の所得格差の縮小に加え、

図3 ブラジル人全体に対する日系人の所得順累積分布（1960年，1980年，2000年）



(出所) IBGEの各年人口センサスのマイクロ・データをもとに筆者作成。
(注) 1960年は日系人の15%とブラジル全体の10%が「所得なし」と回答。

図4 日系人とブラジル人全体の経済活動分布（1960年，1980年，2000年）



(出所) IBGEの各年人口センサスのマイクロ・データをもとに筆者作成。

日系人の所得分布が変化していることから，日系人の中でより所得の低い経済活動人口が日本へ多くデカセギに行

っていることが影響していると推察できよう。

次に経済活動に関して，各年の日系人とブラジル人全体の経済活動の分布をまとめた(図4)。1960年においてブラジル人全体および日系人の半

分以上が農牧業に従事していたが、双方ともに農牧業の割合が減少する一方で工業とサービス業が増加し、特にサービス業は継続的に拡大してきている。しかし、日系人においては農牧業の縮小幅とサービス業の拡大幅、および相対的に工業の割合が大きく商業の割合が小さいなど、ブラジル人全体の傾向とは多少異なっている。したがって日系人の経済活動に関しては、ブラジル全体の産業構造変化に対応する形で変化し、その特色は際立ったものとは言い難いが、農業移民が多くブラジルの農業生産の発展に大きく貢献してきたという日系人の特性をデータからも理解することができる。

V 今後のブラジル日系社会

以上のように人口センサスのデータから、ブラジルの日系人の社会経済的な特色とその変化として、ブラジル国内での居住地域の拡散化、教育や所得における相対的なレベルの高さ、そして、日系人間の格差の拡大傾向が明らかになった。しかし、日系ブラジル人の非日系人との異民族間結婚はますます進んでおり、3世で60%、4世では80%ほどが混血といわれている(宮尾[2008])。したがって、客観的にも主観的にも「日系ブラジル人」という境界線や定義付けは曖昧かつ複雑になりつつあるため、彼らを対象とした定量的な調査研究の実施はより困難になっていくといえる。では、日系ブラジル人によって構成されている社会、つまりブラジル日系社会は今後、どのように変化していくのであろうか。

現在でも日系人が多く居住する地域では、日系人相互の交流や扶助などを目的とした団体や日本語学校が存在するが、参加者の高齢化や若年層のコミュニティ離れなどの問題を抱えている。日本へのデカセギの影響に関しては、当初、民族的な

出自国との交流の活発化がブラジル日系社会の活性化をもたらすのではとの期待が持たれていた。しかし、2001年の調査実施の時点において、当時112万人と推計された日系人の14%にあたる16万人がデカセギ経験者として地域社会に居住していたとされるが、デカセギの成果は個人的な経済状況の向上にとどまっており、地域社会の活性化にはほとんどつながっていないとの指摘がなされている(日系社会実態調査実施委員会[2002:119])。つまり日系人にとってデカセギは、個人的な人生設計の戦略または就職先の一つになっているのであり、ブラジル日系社会というコミュニティとの関連においては位置づけられていないといえよう。

その一方で、一部ではあるが日系人の若年層同士が集まったり結婚したりする傾向が依然として見られ、サンパウロなどにはほぼ日系人の若年層のみが集まる親睦団体、飲食店やディスコなどがある。彼らが伝統的な日系人団体の活動へ参加したり、日本語や日本文化の学習や継承を積極的に行ったりしているとは必ずしもいえない。しかし、多人種・多民族で構成されているブラジルにおいて、彼らを持つ“ニッケイ”という共通の文化や習慣、それらに対する共感や精神的な安心感などが、このような傾向の背景にあると考えられる。また、ブラジルにおいて日系人は非日系人から、正確には「日本人」を意味する「ジャポネス」と呼ばれることが多いが、このことはブラジルの日系人が『正統な』ブラジル人としては認知されていないことを示唆しているとも解釈できよう。そしてまた「ジャポネス」という呼称は、日系ブラジル人の中に「どの程度『ブラジル国民』として認識されているのだろうか」という問いを自らに投げかける契機になっているといえよう(日系社会実態調査実施委員会[2002:100-105])。

以上のことから、進行する混血化とブラジル社

会への同化によりさらにマイノリティになるであろうが、エスニック・グループとしての日系ブラジル人とその社会は今後も存続していくと思われる。しかし、日系人口の高齢化や若年層をはじめとする日系コミュニティ離れ、さらには地域社会の活性化と結びつきにくいデカセギの長期化などにより、「日系人として全体的に共通の利益を見出すことは困難になっている」(日系社会実態調査実施委員会[2002:120])のがブラジル日系社会の現状であろう。そしてこのような状況は、日本移民が創設したコチア農業協同組合(Cooperativa Agrícola de Cotia)や南米銀行(Banco América do Sul)の破綻などに端的に表れているといえよう。したがって、デカセギやブラジルの経済成長などの影響から日本とブラジルのつながりは今後も継続または発展していくであろうが、ブラジル側においてコミュニティとしての結束力や政治経済力を持った存在としての日系社会は、今後そのプレゼンスを低下させていく可能性が考えられよう⁽³⁾。

おわりに

ブラジルへの日本移民100周年は、未来に向け両国の結びつきを強めることを目的に「日本ブラジル交流年」と位置づけられている。日本人にとってブラジルは依然として地理的にも知識や意識の上でも遠い国であろうが、そこには世界最大規模の日系人および日系社会という日本にとっての架け橋が存在する。本稿で考察したように、コミュニティとしての日系社会の今後は必ずしも楽観的であるとはいえないが、このことは視点を変えれば、日系社会とブラジル社会の統合の深化として捉えることもでき、100年前にブラジルへ渡った日本移民が同国の発展と国民の形成に深く寄与している証しであるともいえよう。

ブラジルという国の高まる重要性からも、日本ブラジル交流年をきっかけに日本人がブラジルをより良く知り、相互の交流が活発化することが、両国のさらなる発展ならびにブラジル日系社会の活性化につながるといえるであろう。

注

- (1) 本稿における「日系人」とは、日本国籍所有者とその子孫を意味する。ただし、移民に関して記述する際には主に「日本人」または「日本移民」とし、1960年以降の人口センサス・データによる分析の部分では「日系人」と称することとする。
- (2) これらの人口センサス(IBGE : ブラジル地理統計院)には、本稿で提示する図表の作成を可能とするマイクロ・データが存在するが、1970年の人口センサスには人種に関する設問がないため同年および、比較時期を等間隔にするため1991年の人口センサスは除外した。また、本稿のデータは主にBeltrão, Sugahara e Konta[2008]とBeltrão, Sugahara, Uyeda e Seto[2008]をもとにしている。
- (3) 当該個所の内容については、サンパウロ人文科学研究所元所長の宮尾進氏へのインタビュー調査(2008年9月3日に実施)などにもとづいている。

参考文献

<日本語文献>

サンパウロ人文科学研究所 [1988] 『ブラジルに於ける日系人口調査報告書 1987・1988年』サンパウロ人文科学研究所。

日系社会実態調査実施委員会 [2002] 『日系社会実態調査報告書』サンパウロ人文科学研究所。

宮尾進 [2008] 「ブラジル日系のこれから」(『ニッケイ新聞』7月5日)。

<外国語文献>

Beltrão, Kaizô I. [2005] “Raça e fronteiras sociais : lendo nas entrelinhas do centenário hiato de raças no Brasil,” in Sergei Soares, et al., *Os mecanismos de discriminação racial nas escolas*

- brasileiras*, Brasília : IPEA & Fundação Ford.
- Beltrão, Kaizô I., Sonoe Sugahara e Ryohei Konta [2008] “Vivendo no Brasil : características da população de origem japonesa,” in IBGE, *Residência & integração : 100 anos de imigração japonesa no Brasil*, Rio de Janeiro : IBGE, pp.54-71.
- Beltrão, Kaizô I., Sonoe Sugahara, Maria H. Uyeda e Claudio Seto [2008] *Haine(raízes) : expansão da comunidade nikkei em 100 anos de presença no Brasil*, Curitiba : Associação Brasileira de Dekasseguis ; Associação Cultural e Beneficente Nipo-Brasileira de Curitiba.
- IBGE [2008] *Residência & integração : 100 anos de imigração japonesa no Brasil*, Rio de Janeiro : IBGE.
- McKenzie, David J. & Johan Mistiaen [2007] *Surveying Migrant Households : A Comparison of Census-Based, Snowball, and Intercept Point Surveys*, Washington, D.C. : World Bank.
- Saito, Hiroshi org. [1980] *A presença japonesa no Brasil*, São Paulo : T.A. Queiroz ; Edusp.
- Shindo, Tsugio [2005] *Passos da imigração japonesa no Brasil*, São Paulo : Associação Cultural Akita Kenjin do Brasil.
- Woortmann, Ellen F. [1995] “Japoneses no Brasil/ brasileiros no Japão : tradição e modernidade,” *Série antropologia*, 183, Brasília.
- (Kaizo Iwakami Beltrao / ブラジル地理統計院統計科学大学教授 ;
Sonoe Sugahara / ブラジル地理統計院研究員 ;
こんた・りょうへい / 地域研究センター副主任研究員)